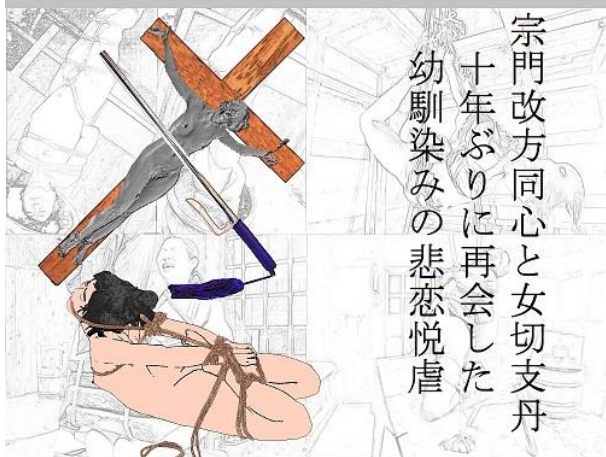


心中切支丹



宗門改方同心と女切支丹
十年ぶりに再会した
幼馴染みの悲恋悦虐

濠門長恭

目次

筒井筒嘆	三
全裸吊敲	二五
懷柔說伏	三七
殉難恍惚	四四
拷責絵卷	六七
市中引回	九三
二十五両	一〇八
絶頂指南	一一四

思慕絶頂

里弥懊恼

無理心中

後書き

一四七

一六七

一七五

一八七

筒井筒嘆

切支丹が捕らえられたのは五年ぶりの椿事だった。禁教令が発されて五十年、ようやく切支丹も根絶やしにされたと思われていたところに、一網打尽された者、実に十四人。与力一騎と同心三名、士分の者わずか四人の宗門改方は、天手古舞いとなった。

宗門改方の役向きは、布令に違背する者を取り締まるという点では町方と似ているが、根本的に異なる部分がある。

第一に、捕縛されて白を切る者がいない。宗門改方の仕事は取り調べではなく『説伏』である。そして、それに応じる信者は少ない。極悪非道の罪人さえ哭いて赦しを乞う拷責

にも耐え抜いて、どころか一刻も早い磔火炙りを望む者までいる。殉教はパライソへの梯子なのだ。しかし、殉教者など出してしまえば、御公儀の覚え極めて芳しくなくなる。これほど厄介な科人もあるまい。

第二に、信者は棄教さえすれば御咎め無しの解き放ちとなる。解き放たれて後に暮しが立ち行かぬまでに身体を損なうのは拙い。平たく言うなら、極度の拷責は控えねばならない。

ただし、信者は科人であっても罪人ではないので、拷問の種類や方法なども細かく定められている吟味法度の掣肘外にある。となると――切支丹信者、取り分けて女囚に加えられる拷責がどのような色彩を帯びてくるか、想像に難くないものがあるう。

宗門改方同心の本庄里弥にとつての煩悶のひとつが、それであつた。まさかに、じゅうてつ従姪の

あさじよ麻女が切支丹だったとは。

麻女などという優雅な名前は通称である。実の名は麻の一字。「昼になってアサが来た」などと悪餓鬼どころか大人にまでからかわれて、みずから名乗るようになった——などという、そんなことはどうでも良い。

麻女は八歳の秋からしばらくの間、本庄家で預かっていた。母親、里弥にとっては歳の離れた従姉に当たる女性が、婚家にょしょうで起きた跡目相続の争いに娘が巻き込まれるのを恐れて、武家である義理の叔父を頼ったのだった。里弥の父は父で、港取締方与力としてのお役目向きに難事を抱えており不在がち。男女七歳にしてなどと諭す暇いとまもなく、里弥と麻女は筒井筒に比すべき仲となったのである。もちろん十三歳と八歳が故事を知るはずもなく。

「絶対、お兄ちゃんのお嫁さんにしてね」という他愛ない約束ではあったが。

その麻女と、十歳ととせを隔てて、役人と科人としての再会だった。

「では、改めて申し聞かすぞ。邪教の教えを棄てぬ者は、磔刑に処す。親兄弟子供は連座、人別帳より削り重追放とする。されど神仏に帰依する者は科無しとして、即刻放免致す」

事が重大なれば城下奉行が出座しているが、科人に声を掛けたのは陪席の宗門改方与力、菱橋師興ひしばしもうおきだった。里弥は二人の先輩同心と共に、御白州の脇に控えている。そして、宙を見据えて身じろぎひとつしない麻女の横顔を、食い入るように見詰めていた。

頬のふつくらした幼女は十年の歳月を閲して卵顔の美女に変じているが、どこことなく昔の面影を髣髴するのは、奪衣婆の手で髻を解かれ髪を垂らしているせいかもしれない。顔よりも変貌著しいのは、当然だが体つきだった。ことに今は縄を打たれているので、胸の盛り上がりが眩しい。白州の上に正座する尻の丸みも艶かしい。

この女性と、少年の頃めおとに夫婦の約束をしたのかと——場違いな感慨に捕らわれる。正確

には、言い交わしたのではない。十三ともなれば分別も付く。戦国の世で有れば元服していても不思議ではない。侍の子としても迂闊なことは言えぬ。ただ笑って頭を撫でただけだったが、幼女にしてみれば承知してもらったと思ひ込んでもおかしくはないだろう。

いや、このようなことを覚えてゐるのは己れだけで、麻女のほうは忘れていよう。

「この場にては仲間への氣遣いもあるう。横に控えおる三名の同心が、手分けして話を聞くゆえに、その折りに申し出よ」

菱橋が分担を読み上げる。

くでらこうじ かかり

「まず、久寺豪次の掛は、以下の五人。紫波屋隠居、庄兵衛。中野屋奉公人、小助。大工権蔵の妻、トヨ。浪人和栗瀬田朗の妻、珠乃ならびに娘、糸乃」

小役人が五人をひと塊にまとめる。

いみちこうた

「次に井路好太の掛は、以下の五人。下田屋三男、梅吉。日野屋掛人、麻……」

かかりうど

「お待ちください」

里弥の口が、勝手に動いていた。素裸に剥かれて縛られ打ち敲かれる女の姿が脳裡にぽあつと浮かび上がり、次の瞬間には、それが言葉となって迸ったのだった。

「麻の掛は、それがしに御下命ください」

「ほう……なんぞ訳でもあるのか」

菱橋が怪訝そうに訊ねる。末席の若造が、何をとち狂ってしやしやり出おるか、不快を顔に表わしている。

「はっ……それは……」

里弥は平伏しながら、腋に汗を掻いていた。女の裸を思い浮かべたなどと言えぬし、なぜそれがあの言葉になったかは、己れにも説明出来ない。

「その者は……それがしの従妹違い、母方の歳の離れた従姉の娘でして……血のつながつ

ている者の言葉なら、あるいは聞き入れるやも……年少の身内を言い聞かすのも、年長者の務めかと……」

そうではない。言葉を探しながら弁明を積み重ねていくうちに、里弥は頭に浮かんだ裸女の意味に思い当たっていた。他の男に筒井筒の娘を委ねてなるものか。この俺の手で、益体もないデウスとかいう神から麻女を奪い返してやる。縛るのも敲くのも……犯すのも、すべて俺でなければならぬ。

「ふむ……説伏は言葉だけではないぞ。同情が手加減につながるとは思わぬのか」
「決して左様なことは」

里弥は身を起こすと、左手を腰の小刀に掛けた。

こんなことに命を掛けてよいのかという迷いは、あった。昨日までは淡い追憶の中に沈んでいた娘。里弥としては、はっきりと言葉にして二世を誓ったわけでもない。もしかす

ると十年前のことなど覚えていない娘。そんな娘のために命を……

無論、里弥は刀を抜き放とうとしてつかんだのではない。鯉口を切り、一寸ほども抜いてから、鏝鳴りとともに納める。武士に二言はないという意味、誓約を必ず守るという意味——すなわち金打きんちょうである。

金打するからには、それにふさわしい誓約が必要でもある。手加減はしない、では話にならない。程度の判別など出来るものではなからう。有か無か、否か応か。この場合でいうなら、必ず棄教させる——であらう。失敗すれば、武士の誓約を違えた恥知らずとして汚名に甘んずるか、さもなくば……

菱橋は、里弥の手の動きや顔色から、咄嗟の決意を読んだのだろう。

「許す。存分に説伏してみろ」

だいおんじょう

大音声で、里弥の動きを封じる。

「はいっ、必ずや」

里弥は両手をつかねて平伏したのだった。

その場で受け持ちが入れ替えられて。里弥は麻女の他に——左官見習の佐吉、美濃屋下女の藤^{ふじ}、商家の後添えに直った女郎上りの黄蝶改め清^{きよ}。この三人を説伏することとなった。十四人のうち女が八人である。三人の分担を公平にするなら男を二人ずつ、女を三、三、二に分けるところだ。若年の里弥が二であろう。それを男が一人と女が三。しかも、大年増と梅干婆は井路に押し付けた。菱橋は比較的若い女を並べることで、里弥が麻女に情けを掛けるか否かを見極めようとしたのかもしれない。

城下町の大きさは人の数およそ五万。日の本のうちで何番目と指折り数えられる大きさが、江戸に比べれば五分の一にも満たない。牢の大きさも、名にしおう小伝馬町に比す

べくもない。そこへ、男牢に比べて狭い女牢に八人も増えては窮屈に過ぎる——というのが理由ではないのだが。女信者は男牢へ、男信者は女牢へ入れる運びとなった。切支丹の教えで身を持せるものかどうか、試してみるがよいという——信仰をぐらつかす手立てのひとつだった。

三人の同心が、それぞれ小部屋を使つて信者の説伏に取りかかる。

里弥が父の跡を襲つて三年。戦にたとえば初陣だった。説伏の手法は先輩からの口伝、過去の書留などで学んではいるが、心許ない。まずは小手調べというよりも、女性を相によしよう手にするのは気が重くて、佐吉から着手した。

まるきり手に負えなかった。何を問い掛けても返事をしない。里弥とて、敵を知るために、切支丹が抄訳したバイブルを読み、理に合わない記述や矛盾した出来事などを幾らかは知っている。そこを衝いて、いわば教理問答を吹っ掛けてみたが、暖簾に腕押し。なに

やらぶつぶつ唱えているのはオラシヨだろうか。

「おまえは殉教とやらでパライソへ行けるかもしれぬが、残されたふた親と兄妹はどうなるか分かつておるのか。非人に落とされて、他国へ追ひ払われるのだぞ」

情に訴えても、オラシヨが焉むことはやかった。

バチン。

肉体を敲く音が隣の小部屋から聞こえた。いよいよ身体への説伏を始めたらしい。

「こやつを素裸にせい」

部屋の隅に控えている下人に、里弥が命じた。

この下人、名を勇造という。歳は二十六、見た目は、あまり勇ましくない。牢屋敷に勤めているが、切支丹の説伏に関しては里弥の下知に従う。いくなれば専属の手下てかであり、囚人の扱いに慣れぬ宗門改方同心への助言役でもあった。

勇造は慣れた手つきで佐吉の本縄を解き、下帯一本にした。佐吉は一切抗わない。

里弥は佐吉を天井の梁から吊るさせた。吟味の手順に従うなら、正座させたまま肩をはだけさせ、そこを打ち敲くのだから、すでに逸脱している。しかし、これが説伏の常道だった。明白な証拠を突き付けられても猶薄情せぬ強かな凶賊と心得よ——とは、八年前の書留に記されている。

里弥は折弓を手を取った。長さは三尺、よく撓るので、問責めには使い勝手が良い。

筆者註：拷問具としての『箒尻』は、まだこの地方では使われていない。

今さら言葉は無用と、里弥は佐吉の背中を渾身の力で敲いた——つもりだったが、人体に危害を加えるという意識が腕をすくませていた。

パチイン。

佐吉はびくつと身体を震わせたが、呻き声ひとつ漏らさない。

なにくそつとばかりに己れを奮い起たせて、二発三発と折弓を振るう。

バチイン。

バツヂイン。

「ぐうっ……」

さすがの佐吉も堪えたようだ。しかし、後がいけない。オラシヨではなく、はつきりと言葉を紡いだ。

「ジェズス様。この人をお赦してください。この人は何も知らないのです」

「おのれっ」

科人に憐れみを掛けられて、激昂せぬ役人がおろうものか。

バチイン。

バチイン。

バッヂイーン。

十発ほども敲き据えて、ようやく頭の血が下りた。もつとも、度を失っていたわけではない。背骨を敲くと手足が動かなくなったり呼吸を妨げて死に至らしめる場合もある。折弓の先が背骨に当たるのを避けて斜めに敲くようにせよとの教えは守っていた。

佐吉は下帯ひとつのまま縄を打ち、女牢へ戻した。

さて——と、里弥は思案する。次は三人の女のうち、誰にするか。もつとも与しやすいと思われる藤にするか、もつとも強かに決まっている清を先に片付けるか。いずれにしても、麻女は後回しにしたかった。

考え込んでいては、優柔不断を勇造に軽んじられる。

「藤を連れて来い」

一時ばかり男牢に放り込まただけで、藤はずいぶんと参っているようだった。

女に理屈は通じぬと、里弥は教理問答など試みず、ひたすら情に訴え掛けた。

「教えを守って、おまえはパライソへ行く。悲願成就であろうな。されど、残されたふた親はどうなる。年明けに祝言を控えた姉はどうなる。家財は没収、非人に落とされて、塗炭地獄の苦しみにのたうつのだぞ」

「……………」

縛された身を縮こめて下唇を噛んでいる。無言だが、さりとて佐吉のようにオラシヨを唱えるでもない。

「親きようだいを苦しめて、それで良いのか」

バイブルにある十の戒めでも「父母を敬え」と教えている。しかしデウスと同格のジェズは、信仰のためには父母を裏切っても良いと言っている。だから、教理問答につなが

りそんな話向きにはしなかった。

だいたい、唯一の神などと偉そうなことを言っておきながら、デウスとジェズスに加えて靈魂までが鼎立するという。しかも、ジェズスの母親も女神扱い。まるきりの矛盾ではないか。日の本には八百万の神が坐すのだから、その中に御仏が^{ましま}淆じつていても不思議ではない——というのが、本庄里弥の考えである。当時の人間としては切支丹への造詣が深いといえるが、生活の土壤に根差しているにしては神仏への理解は浅い。もともと、信仰とは理解するものではなく信じるものである。この男の底の浅さがどういう結末に結び付くかは、今のところ、筆者のみぞ知る——である。

しかし、藤の信心も底は浅いようだった。親不孝を突き付けられて、その顔に迷いの色が浮かぶ。

「親きようだいばかりではないぞ。おまえを雇っていた美濃屋も無事では済まん。旦那に

は恨みもあるかもしれんが、朋輩には……」

「旦那様は御存知のないことです。お店にはお咎めが及ばないはずでたなす」

もう一押しだと、手応えを感じた。

「たしかに、御上からは監督不行届のお叱りがあるだけで落着するが。人の口に戸は立てられんぞ。美濃屋に関われば切支丹と疑われかねない。どれだけの客が暖簾をくぐってくれるかな」

あつと息を呑む藤。

「デウスの教えなど棄ててしまえ。親きょうだいを救ってやれ。美濃屋に恩返しをしろ」

藤の美濃屋への恩讐など、里弥は知らない。恨みのひとつもあるうと当てずっぽうを言ってみて、そうではないと分かったので、言葉を裏返したただけだ。

「あああ……ジェズ様。あたしは、どうすれば良いのでしょうか」

情を揺さぶった後は身体に思い知らせるべきだろうと、里弥は判断した。初陣での手探りである。

「まだ言うかつ」

出来得る限りに声を荒げた。藤が、びくつと身をすくめる。

「この女を素裸に剥け。梁から吊るせ」

たちまちに勇造が、藤の身体に手を掛ける。

「ああっ……いやっ、いやああ」

縄を解かれるのにさえ抗い、帯を解かれまいと泣きながら身をもがく。しかし、囚人の扱いに長けた大の男に抗するべくもない。たちまち、里弥が命じた通りの姿にされた。もつとも、素裸というのは言葉の綾で、佐吉が下帯を残されたのと同様に腰巻までは剥がされてはいない。それは里弥の下知ではなく、勇造の独断専行というよりは、身体にまで染み

着いている吟味法度の掣肘だった。里弥としても、若い娘を羞恥の極限まで追い込むつもりは無い——今のところは。

折弓で、背中ではなく尻を打ち据えたのは、これは男の本能でもあろうか。
ビシイッ。

「きゃあああ——っ」

魂消えるような悲鳴が、小部屋をどよもした。

里弥は、佐吉のときとは違って、いくらかの手加減はしたつもりだが。大仰な悲鳴を聞くと、本気の責めはこれくらいでは済まないのだぞという——なにやら腰のあたりがもやついてくる。

里弥は藤の正面へ回り込むと、距離を詰めて肘から先だけを横に振るった。
バシイッ。

乳房が横ざまにひしゃげて、ふるると揺れた。

「ぎひいいいっ……ひいいい」

身も世もない悲鳴。

里弥は里弥で、背中はもちろん尻とも違う手応えに、男として痺れていた。背中が太鼓で尻が水を詰めた革袋なら、乳房は搗き立ての餅にも似ていた。

もうひとつの顔が頭に浮かんだのを振り払うように、里弥は立て続けに乳房を打ち据えた。

「旦那。まだ小手調べですから、お手柔らかに」

勇造に声を掛けられて、はっと我に還る里弥。女の裸身を目の前にしたとはいえ、劣情に身を委ねかけていた己れに嫌悪を感じた。

「うむ。下ろしてやれ。明日の説伏まで、素裸のままで男牢へ放り込んでおけ」

牢番がいるから、昼のうちは男囚どももそれほど不埒な振る舞いには及ばない——せいぜい、何かの弾みを装って肌に触れるくらいか。しかしそれは、若い娘にとっては想像を絶する地獄に思えたのだろう。

「いやですっ……教えを棄てますっ……だから、もうもう……」

まだ吊られたまま、静は叫んだ。一声ごとに息を使いきっては、しゃくりあげるように息を継いで絶叫を続ける。

なんと簡単なことか。里弥は、むしろ拍子抜けしてしまった。

「下ろして、着物を返してやれ」

裸の肩に着物を着せ掛けらると、襟をつかんで掻き合わせ、横座りになって泣きじやくる。

「あの……これから、どう致しやすんで」

棄教すれば無罪放免とはいへ、即刻の解き放ちではない。

「あ、ああ……踏み絵を持って来い。それから、菱橋様にお報せしてくれ」

いったん心が切れてしまえば後ろめたさもなくなるのか、藤はためらう素振りもなく淡々と、木版に彫られたまりあの絵姿を踏み、二度と切支丹に帰依せぬとの誓書に爪印を捺した。そして、捕らえられた十四人が コンフラリア 講の全員で他に信者はいないと証言した。もしも後に同じ講の信者が摘発されれば、棄教は偽態だったと見なされて、今度は説伏などせず磔火炙りなのだから——嘘ではあるまい。

その間にも美濃屋へ使いが走って、番頭どころか旦那まで駆け付けた。若さ故の気紛れからの邪教信心。悔い改めたからには、これからも変わることなく召し使ってやれと、与力が諭して娘を引き渡して一件落着。ただし里弥に限っても、まだ三件が残っている。

「たいしたものではないか。先陣でいえば一番槍、一番首の功名だ」

上役に誉められて悪い気はしない里弥だが、後がすこしばかり苦しかった。

「次は麻女であろう。是非にも見分させてくれ」

全裸吊敲

小部屋に引き据えられた麻女と向かい合う里弥。部屋の隅に控える勇造。里弥の斜め後ろの壁際に床几を据えて見分する菱橋。

型通りに始めるのは、むしろ麻女を特別扱いすまいと気張っている——というふうに思われはしないか。血のつながりを口にした以上は、それを足掛かりにせねば面目も立たない。そんなふうに、里弥は思案した。

「麻女、十年ぶりだな。俺を覚えているか」

麻女は里弥の顔を見上げた。

「本庄様、お久しぶりでございます」

思い出したのではない。はな端から知っていたという口ぶりだった。

これは——脈があるのではないかと、里弥は思った。佐吉と藤の、どちらかといえば藤に似ている感触だった。加えて、幼馴染に相見えて心を開きかけているような。あいまみえ

「日野屋は母御の嫁ぎ先。その掛人になっているというのであるから、色々と辛苦もあったのであろう」

跡目相続の争いが具体的にどのようなものであったかは知らない。ともかく、従姉の不利な形で決着して、麻女が冷遇されるようになったのだろう。ここを衝けば説伏の足掛かりになるか、あるいは頑なにさせてしまうか。まだ触れぬほうが良いと、里弥は判断した。

「こちらに控えておられる与力殿からも申し聞かせたように、ジェズスの教えを棄てさえしてくれば、御咎め無しの放免となる。十年前の約束を果たせも出来るぞ」

言ってしまったから、里弥は己れに驚いた。まるきり考えてもいなかったことを口走ったのだから——だろうかと、内省も生じた。心にもないことを口にするのは、それなりの算盤を弾いてのことだ。しかし、筒井筒のあやふやな約束を説伏の駆け引きに使おうなどとは思っていなかった。

麻女が里弥の顔を真っ直ぐに見詰めて、言葉を返した。

「たとえ本庄様と夫婦めおとになれたとしても、それは肉体が滅びるまでの束の間の契りです。真理に目覚めジェズス様に魂を委ねれば、永遠の命を授かるのです。本庄様こそ、眼まなこから鱗を落としてくださいませ」

脈があるどころか、佐吉よりも手強い。まさか、宗門改方の役人に説法するとは。

麻女の言葉に反駁すれば、教理問答に巻き込まれる。そして、この女には勝てない。里弥が如何にバイブルを読み込んでいたとしても、それは——陽は西から昇るという記述に目を通したに過ぎない。しかし麻女は、それを本気で信じている。どれだけ理を尽くしても、信念を突き崩すのは不可能事ではないか。理詰めが通用するのは男が相手のときだけだ。そのような虚しい試みを延々と繰り返しては、一番槍の功名も帳消しになる——という焦りも生じた。

「ええい。世迷言など聞きたくもない。言葉で分からねば身体で分かせてやる。勇造、この女も素裸にして吊るせ」

勇造が動く。麻女は動かない。人形のように、いや、されるがままでいながら、きりつと上体を起こしているから、起き上がり小法師のように。縄を解かれ、着物を引き剥がされ、手首を縛られて梁から吊るされた。

里弥の頭の中にしばしば浮かんだ裸女の姿と、目の前の女の姿とがひとつに重なった。

頭の中の裸女は腰巻など着けていなかった。

里弥は麻女に近づいて手を伸ばし、最後の一枚を剥ぎ取った。

麻女は宙を見据えて無言。股間の和毛を隠そうと腿をよじったりもしない。ただ、だらんと吊るされている。

「これから、おまえを厳しく打ち敲く。デウス様が助けてくださるか、身をもって知るが
良い」

目の前の裸身、取り分けて黒い部分から目をそらして、言わでもの台詞を口にしてしま
う。

「地上のことは人の手に委ねるのが、デウス様の為さりようです。私がこの場で敲き殺さ
れたとしても、それはデウス様の人智には計り知れない大いなる御計画の一部なのです」

親が子供に教え諭すような穏やかな言葉が返ってきた。オラシヨを唱えられるより、はるかにやりづらい。

「まだ言うかつ」

バッヂイイン。

正体の知れない怒りと焦燥に駆られながら、里弥はいきなり乳房を敲いた。

「ひいいいっ……」

悲鳴を噴きこぼす麻女。オラシヨを唱えるでもなく、赦しを乞うでもなく、悲鳴の後はわずかに身をもがくだけ。

バッヂイイン。

バッヂイイン。

「デウス様。麻女は幸せです……」

不意に、はつきりと麻女がそう言った。

「現世での苦しみは、パライソへの道標みちしるべなのですから」

おのれ——と逆上しかけて。なぜ、俺はこうまで熱くなってしまうのかと自問するだけの冷静さが、里弥には残っている。

上役が見ている前で無様な真似は出来ないという気負い。それだけだろうか。目の前の裸女と頭の中の裸女とが、重なっては二つに分かれ、分かれては重なる。

お役目の最中に雑念は禁物——と、里弥は麻女の後ろへまわった。尻なら手加減無用で打ち据えられる。目の遣り場に困ることもない。

「おまえひとりがパライソへ行つて、残された母親はどうなる。非人に落とされ他国へ追ひ払われて、いずれは野垂れ死にの運命だぞ」

バツヂイイン。

麻女の返事を待たず——二の腕、肘、手首と順に力を込めて、尻を打ち据えた。

「ああっ……」

悲鳴にしては艶めかしい喘ぎを、麻女が漏らす。パライソへの梯子をまたひとつ昇る悦びか。

バツヂイイン。

バツヂイイン。

バツヂイイン。

十を超える打擲に麻女の尻は真つ赤に腫れ上がり、しかし喜悅の溜め息が絶えることはなかった。

「申し訳ございませぬ」

肩で息をしながら、里弥は菱橋を振り返って頭を下げた。

「こやつ、女のくせに強情な。今すこし、責め口を思案してみたいと存じます」

佐吉よりたくさん敲いたから、決して手加減はしていない。

「うむ。女のほうが痛みには強いというからな。月に一度は血を流すし、何よりも子供を産む苦しみに耐えられる身体になっておる。初手で一人を転ばせただけでも出来過ぎじゃ。そういうところと転ばされては、先輩二人の面目も立たぬぞ」

ははっと、頭を下げるしかない。それでも、未練が残る。

「麻女。お前への説伏は、今日のところは打ち切りとする。素裸のままで男牢へ戻すぞ。それでも良いのか」

麻女は烟るような眼差しを里弥けふに向けた。

「すべてはデウス様の与えられる試練です。迫害を恐れはしません」

ぐっと言葉に詰まる里弥。

切支丹は姦淫を許さぬ。麻女は生娘であろう。男の欲望の凄まじさを知らないのだ。盲、蛇に怖じず。しかし……しかし、なのだった。他の女切支丹は知らず、麻女を囚人の餌食になどさせてたまるかという焦りを抑えられない。

「ええい、痴れ事を言うな」

里弥は縄を取って麻女を縛りに掛かった。解くのは下人に委ねても、縛すのは役人の職務である。宗門改方は滅多に科人を扱わないから、作法通りに縄を掛けるのはひと苦勞だった。

捕縄を二重に折り両腕を背中へねじ上げて手首を縛り、縄尻を分けて二の腕を縛してから首へまわし、乳房を大きな菱形で拉ぐようにして胴を縛る。牢の外では、たとえ一間を歩かせるだけでも、このように縛るのが決まりであつた。

「連れて行け」

未練を断ち切って、里弥は言い放った。

「儂も引き上げるとするか。本庄、焦りは禁物ぞ。一年余も掛けて転ばせた例もある」

それは知っている。一年間ずっと責め続けたわけではない。立って歩けぬほど厳しく責めて、傷が癒えるのを待ってから、二度三度四度と新たな責めに掛けて——最後には、拷責の苦しさに負けて自害したことになっている。切支丹は自害を厳しく戒めているのだから、禁を破った、即ち建前としては棄教したことになる。ただし、正規の記録として保管されている調書では『舌を噛みて自害』と書かれているが、同心が後輩への指南の意味を含めた書留では『じぐわい』とだけ書かれている。わざわざ平仮名を用い傍点まで付しておきながら、舌を噛んだのか首を吊ったのかは書かれていない。この行間から何を読み取るべきであろうか。

里弥が麻女を『じぐわい』させたくない願っているのは無論のことだった。

清への説伏は、短時間で切り上げた。里弥の受け持ちは四人だから先輩二人に比べて一人少ないが、藤が転んだので踏み絵や爪書きに時を費やした。清への説伏を始める頃には、先輩二人は仕事を終えていたという——それだけの理由だった。

清もまた、佐吉と同じようにオラシヨを呟いていたが、里弥の言葉には受け答えをした。

「残された肉親は、この世の地獄を見るのだぞ」

「パライソへ行けるよう、わちきがデウス様をお願い致しんす」

町方の言葉遣いにも馴染んでいるだろうに、わざわざ廓言葉を使うあたり、向こうつ気の強さとしたたかさが透けて見える。

「言うて分からねば身体に言い聞かせることになるぞ」

「存分になさんせ。里の折檻で、痛いのに慣れておりんす」

生半な敲きでは通用しそうにない。

「では、おまえへの責めは明日にしよう。他の者がどれほど敲かれたか同役に尋ねて、その倍ほどには痛めつけてくれるぞ」

責問はせずに、素裸に剥いただけで牢へ戻したのだった。

懐柔説伏

里弥は独り身で父母は健在。弟の正次郎も十九で部屋住まい。一家四人で夕餉が常であるが、この日は先に残り物の菜で腹を作って、牢屋敷へ取って返した。

夜を徹してでも切支丹の懐柔を試みるという里弥に牢番はいい顔をしなかったが。

「おまえたちに迷惑は掛けぬ。刻限になれば明かりを消して去ね」

となれば、細々とした決まり事を言い立てる者などいない。

男牢に出向いて、里弥は目を瞠った。およそ考えていた光景とは異なっていたからだ。

牢格子に近い一角に、五人の女が鉤方に座って、その中に二人の娘を取り込んでいる。中の二人は、麻女と糸乃。外には糸乃の母である珠乃が鉤形の角に座り、清、トヨ、松、栄が端座している。二十人を超える男どもは気圧されて、狭い牢内で三尺ばかりも離れて犇めいている。年上の女たちが生娘を守っている——凶であつた。

何の騒ぎも起きていないのだから、牢番も詰所に引っ込んでいる。

日が暮れてから、前触れも供も無く同心が牢を訪れたのだから男どもも正座し直して、何事ならんと様子を窺っている。

里弥は牢格子に向かい合つて腰を落ち着けた。

「麻女、少しく話をしたい」

麻女が身体ごと向き直った。問の言葉は発さない。

「日野屋の掛人となっておるそうだが、もしや母者は」

「七年前に身罷りました」

説伏で母親を持ち出したのは拙かったか。

「うむ……遅まきながら、お悔やみ申し上げる」

女信者だけでなく、牢内一同が耳を澄ましている。

「俺のほうは父母供に存命だが……父は、すっかり老け込んだ。港方与力を罷免されてからは」

何故ですかなどと訊ねない——遠慮ではなく聡明さを持っている麻女だった。御政道に
関わる事供を、事もあろうに破落戸ごろつきどもの前で語れるはずもない。同じ理由で、里弥は日

野屋の（おそらく）内紛について訊ねはしない。

「さいわいに、無役の者を遊ばせておく余裕など、お家には無い。こうして宗門改方の同心にお取り立ていただいた次第じゃ」

話の接ぎ穂が無くなった。

「何故にデウス信心など始めたのじゃ。もしや誰ぞに勧められたのか」

麻女が里弥の瞳を探った。探索を疑ったのだろう。

「それはお答えできません。母を亡くし三年後には父も身罷り……何かにすがらずには居られなかったのです」

「しかし、本邦には八百万の神も仏も居ろう。何故に異国の神なぞを」

「では、私と父母の不遇は、前世の因果だと申されるのですか。どこまで償えば、来世の果報を約されるのですか」

麻女の口調が激してきた。女の癩癩を破裂させてくれるのも困るが、教理問答に引きずり込まれては、男の理屈と女の理屈とでは溝が深まるばかり。

「行ないを悔い改めさえすれば、デウス様は一切をお赦しくださいます。後は、道を誤らないように歩いて行くだけなのです」

「うむ……俺とは異なる道を、か」

なんとか説伏しようと出向いた——というのは口実で、不埒を企む輩に目を光らすのが真意であつてみれば、説伏の目算があるわけではない。

「覚えておるか。八つのおまえは、俺に添い遂げたいと、そればかりを言つておつたな。デウスを棄てて、十年前の約束を果たしてはくれぬか」

これだけは、良く良く考えた上での言葉だった。

棄教したという途轍もなく大きな傷を負った娘を嫁にしようなどという、すくなくとも

真つ当な男は居るまい。

そして、それはそのまま里弥の事情でもあつた。与力職をしくじつた男の息子。町方や港方ならまだしも、閑職（昨日までは、そうだったのだ）の同心風情に娘をやれば家門に傷が付く。町人でさえも二の足を踏む。かといって、そこら辺の娘と野合（恋愛）するほど自堕落にはなれない。

割れ鍋に綴じ蓋。案外と似合いの夫婦になれるかもしれぬ。甘酸っぱい追憶とほろ苦い現実とが緋い混ざつた複雑な想いが胸に広がる。

「そのことなら、先に申し上げた通りです。貴方様に素裸にされて打ち敲かれる前に……」

麻女は、身体ごとそつぽを向いた。もう、何も話し掛けなくてください。まだ敲かれた痣の残る裸身は、そう言っているように見えた。

里弥もまた、黙つて身体の向きを変えて、牢格子に背をもたせた。

もしも、このまま男女を入れ違いにしておくのなら、連夜の宿直とないなど出来っこないと、里弥も諦めていただろう。しかし、切支丹を他の囚人と入れ込みにするのは間に合わせの処置だった。牢屋敷の空いた隅を細かく仕切って独りずつの押込牢を作っているところ。明日には移せるだろう。

これほどの手間を掛けるのは、信者をひとまとめにしておくお互いに励まし合つて、転ぶ者も転ばなくなるからだ。それと今ひとつ。信者が囚人を説伏しかねない。これも、過去に実例があつた。拷問に耐え抜く者を、囚人は尊敬する。しかも信者は礼儀正しく、喧嘩をせぬどころか囚人同士の理不尽な牢内仕置きさえも甘受する。このような態度を馬鹿にする者もいれば崇める者もいる。そして、日を追うに連れて崇拜者が増えていく。朱に交われれば赤くなる。悪い種は植え付けぬに如しくはないのだった。

——宿直とはいえ、不寝番ではなかった。役人の姿があるだけで、囚人は借りてきた猫

になる。里弥は背後の裸身に落ち着かぬものを感じながらも微睡んで。

明け六つに早番が来るといったん家へ下がり、巳の刻になってから出仕した。

そして、拷責に明け暮れる一日が始まる。

殉難恍惚

里弥は、素裸で吊るされている麻女と向かい合った。

娼妓上がりの後妻、清の説伏を駈して四半時の休みを取った後である。清は腋の下から脹脛まで、全身余すところなく折弓で打ち敲き、かつ、つついた。上役に約した通り、麻女には同じかそれ以上の責めを加えるつもりでいる。

「転んではくれぬのだろうな」

分かり切ったことではあるが、手順として訊ねる。

「無駄なことです。どれだけ現世で責め苦しめられましよう、永遠の命は手放しません」

「そうか……」

早くも、里弥は徒労を感じている。しかし、心を鬼にしても麻女を責め抜いて転ばせてやるのが、人の道でもあり幼馴染への愛情だと、己れに言い聞かせる。

里弥は間合いを取って折弓を握り締め、わずかに掌の力を緩めた。そのほうが手首を返しやすく、打突の威力が増す。

ひゅんっ……風を唸らせて折弓が奔り、麻女の脇腹を打ち据えた。

バツヂイイイイン。

「くうっ……」

麻女は苦悶に顔をしかめたが、悲鳴は堪えている。

里弥は腕を振り抜いて折弓を左へ流すと、反対側の脇腹を打った。

ひゅんっ……バツヂイイイン。

五度まで打ち据えてから、里弥は麻女の真横へ移動した。

ひゅっ……バシイイン。

折弓が胸に深々と食い込んで乳房をひしゃげさせた。

「ひいっ……」

麻女は、さすがに悲鳴をこらえきれない。

三発を与えてから後ろへまわって尻を滅多打ちにする。

麻女は呻き声だけで耐えた。

ここまでは小手調べ。昨日の打擲と大差ない。

「勇造。六尺棒を」

すでに清への拷責で勇造も要領は呑み込んでいる。六尺棒を麻女の足首の高さで水平に支える。

里弥は捕縄を手に、麻女の足元にしやがみ込んで。足首をつかんで、ぐいと横に引いた。

「いやああっ……」

麻女が羞じらいの悲鳴を上げた。脚を閉じようとする――のを、里弥が男の力で引き戻して、六尺棒に縛り付けた。もう一方の脚も同じように六尺棒に縛って。麻女は二尺ほどの開脚を強いられた。

「女を辱めて……このようなことまで、御役人様はなさるのですか」

これまでとは明らかに違う、恨みがましい声色。

どのような手立てを用いても、おまえをデウスから奪い返したい――と、言いかけて。

それでは、あまりに私情が色濃いと、思い直す。

「このようなこと、まだまだ手始めと思え」

清に吐いたのと同じ台詞になった。

里弥は折弓をもたげて、麻女の股間をつついた。和毛を搔き分けて肉襞をなぞり、折弓のささくれで引つ搔く。

その度に麻女は、腰をたひびくつと振るわせる。

淫らがましい真似をしながら、里弥には興奮も劣情も無い。腰のもじつき、表情の変化を冷静に見定めている。

清には淫裂の奥まで折弓を挟り挿れたが、麻女は生娘であろう。十八になろうと二十になろうと、いやしくも名のある商人の娘なら当然である。里弥は、敢えてそれを疑わない。

とすれば、この辱しめは避けるべきである。

里弥は折弓を下げた——次の瞬間、肘から先を撥ね上げ手首を返した。

ビシッ……折弓の背が淫裂を縦に打った。

「いやああっ……」

甲高い悲鳴が小部屋を引き裂いた。

「ううう、ひどい……」

麻女の頬に涙が伝った。科人として相見えて、初めて見せる涙だった。今さらに両膝をくの字に折って太腿を閉じ、必死に股間をかばおうとする。

声を掛けるのは、まだ早い。

麻女の膝が緩むのを待って、再び里弥は折弓を撥ね上げた。

「きやああああっ……」

魂消えるような悲鳴だが、同じように静の淫裂を打ち据えたときとは、明らかに音色が

違っていた。静は腹の底から絞り出したような、悲鳴というよりは獰猛な犬が吠えるような声だった。麻女のは、藤の尻を敲いたときに近い。

つまりは、まだ余裕があるということだろうか。だとすれば、己れが萎縮しているのだろう。これを、菱橋様は懸念されておられたのではないか。

里弥は一步下がると、肩から先、二の腕までも使って折弓で淫裂を斬り上げた。

「ぎゃわああああっ」

喉が破れんばかりに、麻女は吠えた。膝を折つてのけぞり全身を強張らせ、まるで宙に浮かんでいるように静止して……それから、がくんと頭を垂れた。気を失った——のではない。

「せいなる、せいなる、せいなるかな……」

節を付けてオラショを呟いている。

「まだ分からぬかつ」

唐突の激情とともに、里弥はいっそう強く淫裂を斬り裂く——ほどに打ち据えた。

再びの絶叫。そして、はっきりと悦びの声を上げた。

「デウス様。麻は幸せです」

激痛のさなかの歓喜は、里弥には理解できないものだったが、それ以上に——麻女が己のことを麻と言った一事が、里弥をさらに激昂させた。頑なに麻女と言い張ってきたのに。それほどに忘我なのか。嬉しいのか。

しかし。激情にまかせて滅多打ちするには、女淫は繊細に過ぎると判断するだけの冷静は留めていた。

静よりも無惨に全身を笞痕で埋め尽くしてくれるわ。

手始めに、里弥は麻女の下腹部から白い部分が無くなるまで、二十を超えて折弓を振る

った。

麻女は悲鳴を上げない。初めは低く口ずさみ、やがてだんだんと大きく、節を付けてオラシヨを唱える。

「しゅよ、みもとにちかづかん。のぼるみちは、じゅうじかに……」

正確には、これは祈りの言葉ではなく、ヒムネと称する神を讃える歌であるとは知っている。しかし里弥にとっては、祝詞と念仏ほどにも違いは無い。

「ええい、耳障りな。勇造、芋縄を噛ませろ」

筆者註：芋縄とは、芋の茎を編んで縄にして味噌で煮しめた、梱包資材と野戦食糧を兼ね備えた物を云うが、捕物の場や牢内では竹で作った猿轡を指す。ただし、近年人気のアニメで使われている物とは違い、細い竹を短く切り節を抜いた物を連ねて縄を通してある。

芋縄は囚人を押送するときには必須の小物だが、さすがに小部屋には置いていない。勇造

が詰所から取って来た。噛ませるのも下人の役目だから、彼が麻女の裸身に触れるのを里弥は黙って見ている他なかった。

見ているうちにとんでもないことを思い付いたが、私情を交えた朝令暮改は慎むべきと自制する。

口に細い物を噛まされただけだから、不明瞭ではあるが言葉を発することは出来る。しかし麻女は、黙れという里弥の強烈な意志の表われである芋縄に逆らってまでオラシヨを唱えたりはしなかった。

「勇造よ。その女をぶん回してくれ」

「へえ……」

これは思い付きではなく、清を説伏していたときから考えていたことだった。清よりも麻女を厳しく責めた証にと、清には手控えていた。

里弥から目論見を教えられていない勇造は、怪訝な顔をしながらも下知に従う。麻女の大の字開脚させられた裸身は、心の臓が五つ拍つ間に一回転くらいの早さで回り始めた。

里弥が六尺棒の内側に足を踏み入れる。棒をかわして足を踏み替えながら、すでに痣だらけになっている裸身目掛けて折弓を振るう。

バヂイーン。

「びひいつ」

里弥の腰が座っていないから、それほど強い打撃にはならない。しかし、麻女には、どこを打たれるか分からないので不意打ちとなる。里弥は上下を自在に変えられるし、すくなくとも前を敲くか後ろにするかくらいは操れる。

乳房、尻、背中、尻、乳房、脇の下と敲いて、その次は背後から尻の谷間へ向けて撥ね上げた——のは、内腿に当たってそのまま滑り上がり、蟻の戸渡を打ち据えた。

「むまああっ」

裸身が反り反った——まま半回転したところを狙って撥ね上げた折弓が、今度は見事に女淫を抉った。

「もぼおおおおっ……」

吊っている縄に撚りが掛かって回る速度が落ちる。勇造に命じて六尺棒に勢いを付けさせる、だんだん縄が短くなって、里弥の目の高さに乳房がきていた。

里弥は腰に折弓を差して、両手で麻女の乳房をわしづかみにした。折弓で敲いているうちは搗き立ての餅に似ていると感じたが、掌に乳房は冷たく、指を撥ね返す弾力は餅の比ではない。思わず、二度三度と捏ねくってしまった。

麻女の苦鳴を聞きながら、里弥は乳房を横へ突き放った。麻女の裸身が前後左右に揺れながら反対方向へ回り始める。吊り縄の撚りが解ける勢いで、回転が次第に速くなる。

麻女が手前へ振れて来るところを敲く。威力は増し、当たりどころは散らばる。しかし股間を狙ったときだけは太腿が案内となつて、ほぼ確実に中芯を打ち据える。麻女のくぐもつた悲鳴が途切れることなく続いた。

吊り縄の撚りが戻り、さらに回転は続く。勇造がしゃがみ込んで六尺棒に勢いを付けるので、また里弥の目の高さまで乳房が上がる。そこから逆方向へ回り始めて、麻女の足が床を掃くほどに下りる。

そこでようやく、里弥は大きく後ろへ下がつて。惰性で回り続ける裸身をしばし眺めた。静と同じように、腋の下から乳房、背中、下腹部、太腿から脹脛まで——赤黒い筋が無数に刻まれ、そのまわりは赤く腫れて、肌に白いところは残っていないと言つても過言ではない。そして静とは違って、肌が裂けて血を流している傷もひとつやふたつではない。

金創医に手当てさせて、次の説伏はすくなくとも傷がふさがってから——四五日は後の

運びとなろう。

それにしても、信心とは斯様に凄まじいものであるのか。

麻女は意識を失っているのか朦朧もろろとしているのか。だらんと吊るされ頭こころを垂れているが、その表情はあまりに安らか。微笑んでさえいるように見えた。

——麻女の裸身が、ようやく回転を止めた。

これで終わりにすべき頃合いだとは思うが。あの顔を苦悶と後悔に歪ませてやりたい。凶暴な衝動が里弥を駆り立てた。

「勇造。塩を持ってこい。粗塩で良い、井一杯ほど入り用だ」

「へえ……けど、これ以上はやり過ぎと思ひやす。だいいち、塩なんざ、よほどにしぶとい奴にしか使いませんぜ」

さすがに牢勤めの長い男だけに、里弥の意図を察して意見をする。

「これほどにしぶとい罪人を、おまえは見たことがあるのか」

「敲問でここまでやらかすのを見たのは、これが初めてでさあ」

遠回しにやり過ぎだと指摘して。言うことは申し上げたんですから、後は旦那の裁量ですぜ——と、心の中で思ったのかどうか。とにかく、勇造は下知に従った。

里弥は、先に麻女の芋縄を取り除いた。

「麻女よ。いい加減に夢心地から醒めぬか」

里弥は掌一杯に塩を盛って、やはり男の本能であろうか、まずは乳房に摺り込んだ。

「ひいいいっ……」

麻女は逃れようとして身をよじったが、宙に浮いているので、六尺棒に縛り付けられた足を藻掻くだけ。

如何にして苦痛を与えるか。それを考えると、乳房をわしづかみにして指を食い込ませ、

右左にねじりながら掌で塩を揉み込んでいく——という次第になる。乳首を摘まんて親指の爪を立てるのも効き目があるう。

「ぐうう、う……里弥様、赦してください」

名前を呼ばれて、ふっと仏心を起こしかける。しかし……赦してと言った。あとひと押しではないのか。

「赦すも赦さぬもない。ひと言、ジェズスの教えを棄てると言ってくれ。俺も、幼馴染のおまえを苦しめるのはつらいのだ」

「……………」

物言いたげな沈黙。しかし、開いた口からは、切支丹信者の言葉しか出てこない。

「それだけは……出来ません。私からデウス様をお願いできたとしても、里弥様を救うのは無理でしょう。インヘルノに落ちる、お可哀想な里弥様……」

「ええい、黙れ黙れ」

芋縄を噛ませてくれようとして、ふと、先ほどのとんでもない思案を思い出した。言葉を封じるには打って付けた。里弥は着物の裾に手を突っ込んで下帯を抜き取った。軍いくさふん禪を三尺の長さに切り詰めた、今日で云うところの越中禪である。

それを丸めて、麻女の口元に突き付けた。

「口を開けろ」

筆者註：六尺禪は尻絡げで働く者たちに好んで使われていた。尻を露出する機会のない身分の者は着用しなかった。越中禪に似たもつし畚禪もあるが、こういつた使い方においては差違がないので、拘らないことにする。

どうせ激しく拒むに決まっている。鼻を摘まんでも口を薄く開けて息をするだろう。顎をつかんで力づくか、腹を殴るか——と、思案していた里弥だったが。

麻女は素直に口を開けた。驚いた里弥が手を止めている間も、口を閉じなかった。

里弥は我に還つて布を口に押し込んだ。腰紐で頬を縊る。

信心を棄てぬ頑固さとこの素直さとは、どう考えれば良いのかと里弥は戸惑う。信心ゆえに受ける迫害は悦んで受け入れる——殉難というものであろうか。

「むうう、もぼお……」

麻女が、まったく喋れぬことを確かめるように呻いた。すでに瞳が烟っている。

おのれ。これでもまだ法悦に浸っておれるか思い知れ。里弥はもう一方の乳房にも荒々しく塩を摺り込んでから。諸肌脱いで麻女に抱き付き、両手に塩を盛って、背中から尻にかけて——塩をまぶしてから、執拗に肌を擦った。

ざりざりした手触りの中にも、胸と腹に密着する女人の肌が艶かしい。

「んびいい……もぼ、あううう……」

言葉を封じられたのを幸いとばかりに、麻女が痛みになかせて呻く。苦痛から逃れようとしてだろうが、己れから里弥に身体を押し付けてくねらせる。

独り身で、減知された家録とわずかな俸録とで父母を養い弟を食わせている里弥は、そうそう女の肌に接する機会が無い。下帯を外した下半身が生硬くなってくるのも焉むを得ぬ仕儀だった。どうやれば与える苦痛を大きく出来るかを考えての工夫ではあったが——そういう下心が皆無だったと言えは嘘になろう。

当然の続きとして、かつ、下心に忠実に。里弥は麻女の背後に回り込んだ。片手で乳房をつかんで胸に麻女の背中を引き付け、片手で腹に塩を揉み込む。すでに半ばまで頭をもたげてしまった部分は、麻女の尻の谷間に押し付ける。

さすがに気づいて、麻女は呻きながらも身悶えしなくなった。身体を動かせば、尻に挟まれた物を、いっそう強く意識せざるを得なくなるからだろう。裏を返せば、激痛の中に

それだけの夾雑物が入り込む余裕が残されている。

これでもじっとしておれるか、試してやる。里弥は残しておいた最後の「一か所」、股間をわしづかみにして、塩を揉み込んだ。

「もぼおおおっ……」

腰を引いて逃れようとする麻女。当然に、着物越しとはいえ尻の谷間に挟まれた物を刺激して——ますます里弥を怒張させる。

里弥の裡で怪しからぬ心が動く。もちろん役儀として切支丹の女信者に恥辱と苦痛を与えるのではあるが——中指を淫裂に突き立てて、浅く抉った。だけに留めたのは、指の先に行き止まりを感じ取ったからだだったが。

「もぼおおっ……おあああ……」

つかまれている乳房の激痛も股間のおぞましさも無視して、激しく藻掻く麻女。腰をく

ねらせる、尻に嵌まり込んだ怒張に押し出されたわけでもあるまいに、みずから腰を突き出して、いつそう深く指を股間に咥え込む。

びくつと腰が跳ねたとき、里弥は、指の先がぬぷつと何かを突き抜けたのを感じた。慌てて指を引き抜いてみたが、何も異変はなかった。魔羅の太さがなければ新鉢あらばちは割れぬのかと、初めて知った里弥だった。

何気に氣勢を削がれた感じになって。全身あまねく責めたことではあるし、ここまで痛めつけておけば手加減したとは思われないだろう。麻女への説伏は終えることにした。

さすがに厳しく責め過ぎたかと反省めいた気も起きかけたが。麻女の顔になお残る恍惚の気色に気づくと、焦燥を掻き立てられる。よかろう。跡始末まで、きっちりしてやろう。

麻女を吊りから下ろして、傷だらけ塩まみれの裸身に慈悲を掛けぬ縄を打って、禪の猿轡を嚙ませたまま、牢ではなく裏庭へ引き出した。

裏庭は斬首の処刑場でもあるから十分に広く、隅には井戸も備わっている。里弥は幾分の手間を感じながらも勇造に縄を解かせ、井戸の傍にある松の枝から麻女を吊るした。

素裸の女囚を連れ出し、まして樹に吊るすなど——吟味法度の掣肘外である切支丹にでもなければ施せぬ狼藉。手隙の牢番、同心、与力までが物見に蝟集する。菱橋の姿もあった。

十人もの好奇と当然ながら好色の目に曝されて、これまでは毅然と辱めに耐えてきた麻女も狼狽する。せめて股間は隠そうと腿をよじり合わせる。六尺棒で開脚させられたときは、里弥を蹴ろうとさえた。

しかし抗い虚しく、小部屋で敲かれていた姿を再現してしまう。

里弥は勇造に水を汲ませると、みずから釣瓶を手に、麻女に水を浴びせた。傷口に摺込んだ塩を洗い流すためだが、頭の上からさらには顔の真正面からもぶっ掛ければ、簡易な

水責めでもある。口に詰められた禪が水を吸い、それが麻女の口に滴れば、男の汚れを無理強いに飲ませる屈辱も与えられる。

上から掛けるだけでは女淫の中の塩までは洗い流せぬから、掌に水を掬って、ぴちやぴちやと叩く。

痛みよりも著しい羞恥に、麻女が身悶えする。羞恥に加えて傷の痛みだと分かつていても――もしや、急所を弄られて不本意な感覚に襲われているのではなからうかと、想像を逞しくする者もいるだろう。麻女の羞恥を目の当たりにするうちに、里弥はそこに思い至った。と同時に。里弥も他人の目を意識して、先々のことに不安を抱いた。首尾良く棄教させたとして、麻女を娶れば他人は何と見るだろう。

知ったことかと、すぐに開き直った。詰め腹を切らされて御役御免、加えて家禄を減知されたときに、父にとって本庄家は終わっている。息子が端役に任じられたのは家門の恥

ところと思え、喜ぶなどんでもない。また里弥としても、出世は諦めている。後ろ指を差されても知ったことか。むしろ。切支丹を棄てさえすれば、商家の厄介娘でも武家の妻になれるという——世を憐んで邪教に走る者への牽制にもなろう。宗門改方の役人としては、立派な振る舞いではなからうか。

肝が据わったところで、麻女への水責めは御仕舞にした。

戻すのは男牢へではなく、出来上がったばかりの押込牢だった。これで、今夜は懷柔説伏に通うことなく、昨夜の寝不足を取り戻せる。